

「う……」

「き、きつと悪夢を見たんですね」

「多分、そう……」

「でっ、でも大丈夫です。悪夢の内容さえしつかりと覚えていれば、もう夢に出てくることはないですから……」

彼女の語りはえらく早口で、そのうえ小声で、そして吃りを含んでいたため、注意深く聞き取り、十分に間をとつてからその内容を理解した。

それから私は、突然この見知らぬ女性から強く抱擁されていた。一瞬だけ肉体の硬直と寒気を覚えたが、彼女と同じ性を有する私が過剰に反応する道理もないだろう。おそらくこれは文化の違いであり、彼女にとっては何てことはないスキンシップのようだが、それにしても少し過剰すぎやしないだろうか。

「あの、すみません、ちよつと、苦しい……」

「う、動かないで。いいですか？ 夢の思い出は起床後すぐに揮発するから、忘れる前に今の悪夢を記憶へと定着させてください」

彼女には人の話をあまり聞き入れない、少し強引な節が

あるようだ。その華奢な身体に抵抗しようと思えば、簡単にそうできただろう。だが誰かに抱擁されるなんて経験は母親のそれ以来十数年ぶりだったし、強引でも不思議と嫌な気にはならなかったので、今はなすがままに受け入れるとしよう。彼女のうなじからは、少しだけ汗の匂いがした。

「柔らかくて、きれいな白い肌をしますね、このあたりじゃ珍しい」

突然肌を褒められるとは思っていなかったもので、一瞬返答に詰まった。

「え？ ああ、はい。出身が別の居住区ですから……」  
首から下を抱擁で固定されながら、視線だけで周囲を眺める。それは二人暮らしでも余裕をもって生活できそうなほど、十分な広さを持つ空間だった。

\*

だが何と言つてもこの中で一番注目を引くのは、作業部屋の中央に鎮座する円筒状の計算装置だろう。内部ではきめ細かな金導線の配線が規則正しく繊維状に張り巡

らされ、それらの周囲を分厚いガラスでぐるりと囲んだ、少し笑えるほどに大げさな機械装置がそこに佇んでいた。ランタンが放つ怪しげな光は金属配線に対して乱反射し、装置の神秘的な存在感をよりいかがわしげに浮かび上げていた。

そして驚いたことに、この部屋は先程まで夢で眺めていた間取りと全く一致していた。

そうだ、段々と思いついてきた。この中に「マヨラナ粒子」が入っていて、これが「量子計算機」というやつなのか。だとすれば配線で接続されているこの四角くて白い箱は「古典電算機」に違いない。

「ひよ、ひよっとして……お姉さん、この量子計算機にご興味が？」

(本編より)

「そ、そうです。人類滅亡以前に記録されていた RSA 暗号文を、毎日毎日解読し続ける作業です」

「どれぐらい続けているの？」

「じゅ、十一年間毎日ずっとです。それにわ、私だけじゃありません。なんでも私の先代の罪人も、そのまた先代も、先代も、毎日のように暗号解読をしていたらしいです。その日に解読した復号文を看守に手渡さないとい、一日分の食料が頂けないので……」

「しかしそんなにも時間をかけて、一体何の暗号を……」  
「に、日記です」

「日記？」

「あ、アリアスという女性研究者の暗号化日記です」  
暗号化日記。それは私にとってあまりにも聞き慣れない単語の一つだった。

(本編より)

「ら、ラクダの肉をケバブしたものと、ラクダのチーズと、香辛料と共に煮込んだ豆とを一緒にピタパンで包んだ携帯食です。電算機を操作しつつ手を汚さずに食べられるんで、電脳自治区ではメジャーな料理なんですよ」

何時間寝ていたのかは思い出せないが、以前食事をしたのは覚えていないほど昔に感じる。たまらず私は大き

な一口でかぶりついた。

「へえ、あちち……うん、これは初めて食べるけどなかなか……」

「ごちそうさま。で、では私は入眠します」

「え、もう?」

「き、基本的に暗号解読者は昼夜逆転生活ですからね。量子計算機を動かすには、砂漠の放射冷却効果を使って氷点下まで冷やす必要があるんです。この仕事は太陽が沈んでから作業を始め、太陽が昇り始めてから作業を終えるのです」

「夜に働かざるをえない、つてわけね」

「はい。ですから、と、トリエさんは自由に過ごしてください。本棚には私好みの空想小説を適当に並べてますし、喉が渴いたらそのラクダの膀胱袋に飲み水が入ってますから適当に飲んでください。あと眠くなったら適当に寝てください。では、おやすみなさい」

ベイグルはそう言い残し、簡易ベットの上でラクダの毛皮に包まった。私は喉の乾きを癒すため、ラクダの膀胱に口をつける。ぬるい水からは、ほのかにラクダの獣

臭がした。

「ラクダ、ラクダ、これもラクダか……」

(本編より)

「そういえばトリエさん、あと二日ですよ」

「何が?」

「何がつて、公開処刑の予定日ですよ」

「……」

「ひよつとして、日記を読むのに夢中になって忘れていたとか……」

「そんな訳ない、いや、まさかそんな訳はないぞ」

「およそ一ヶ月前は脱出してみせると息巻いておりましたが、あれから準備の方は……」

「待つてくれ。違うんだ。いや、そうではない」

実際のところ、脱出のプランは脳内で仕上がっていた。あとはこれを実行に移すだけだが、残すはこのベイグルという少女から同意を得られるかどうかにかかっていた。

(本編に続く)

広告欄

この作品の完全版は、第三十一回文学フリマ東京で頒布予定の「next kawaii inversion」に収録されています。

